

住宅都市整備公団 田原団地建設予定地内

田原城址・Ⅵ

—— 四條畷市大字上田原 ——

1986・3

四條畷市教育委員会

住宅都市整備公団 田原団地建設予定地内

田原城址・VI

—— 四條畷市大字上田原 ——

1986・3

四條畷市教育委員会

は し が き

昨年に引き田原地域における住宅都市整備公団の建設計画にもとづく発掘調査は、田原城址本丸跡より南西、西の堀の南西側窪地を中心とするものであり、調査期間は昭和60年7月から昭和61年3月末日までであった。

西の堀は本丸に続く二の丸から大きく迂回して南東方向に突出した屋根を利用したものであり、この西の堀の南西部をかこむ窪地は堀の遺構であろうと推定していたが、今回の調査でこの予測が明らかとなった。堀の規模は巾約40m、深さ16mあり、田原城の西南部の固めとして有効に機能していたことがうかがえる遺構である。またこの堀が埋立てられ現地形となつたのは、江戸時代末期であろうと推定することができた。

室町時代の終り、三好長慶が飯盛城をその居城と定め、近畿一円に勢力をふるった時期の支城としての田原城は、今日まで大きな破壊を免がれて、本丸、二の丸、かくし井戸、門口、矢の石など数多くの城にまつわる地名を残しつゝ保存されて来た。今回を含めて8次に亘る調査によって、この田原城の全容がほゞ明らかになったことは誠によろこばしい限りである。

調査に当っては、大阪府教育委員会、住宅都市整備公団関西支社、田原宅地開発事務所、上田原区長奥田正文氏をはじめ多くの方々のご指導、ご協力をいたゞき、改めて関係各位に深く謝意を表するものである。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻井敬夫

例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が昭和60年度に住宅都市整備公團田原開地建設工事に先立ち、住宅都市整備公團関西支社より委託を受けて実施した四條畷市大字上田原791番地他に所在する田原城址発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和60年7月1日に着手し、昭和61年3月31日まで発掘調査を行った。
3. 発掘調査は、教育委員会歴史民俗資料館技師・野島 稔を担当者とし、調査補助員として吉田武司・吉田安宏・堀田英明があたった。
出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔・吉田武司・川本三智子・秋山敬子・泉 節子・田中成美・柴山 交・大貫久美江・堀 ひろみ、三村利都子があたった。
4. 本書の執筆は、野島 稔が行った。
5. 発掘調査の進行・報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大東高校・山口 博、大阪府教育委員会・堀江門也・玉井 功、寝屋川市教育委員会・塙山則之、財団法人枚方市文化財研究調査会・宇治田和生、三宅俊隆、桑原武志、畠古文化研究保存会の諸氏、諸機関から種々の御教示をうけた。明記して感謝の意を表したい。
6. 発掘調査の進行については、住宅都市整備公團関西支社、田原宅地開発事務所、四條畷市田原開発促進協議会、上田原区長、水利組合その他関係各位には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表したい。又、調査作業については、山田組、奥野重機の全面的な協力を得た。

本文目次

はしがき

例　　言

I 調査に至る経過.....	1
II 調査の位置と歴史的環境.....	5
III 田原城研究史	8
IV 調査概要報告	11
V ま　と　め	24

挿入目次

- 第1図 田原城址年度別調査位置図
- 第2図 田原城址周辺地形遺跡分布図
- 第3図 田原城址構造図
- 第4図 田原城址南濠調査地位置図
- 第5図 田原城址南濠調査区断面実測図 I
- 第6図 田原城址南濠調査区断面実測図 II
- 第7図 田原城址南濠調査区断面実測図 III
- 第8図 田原城及び古城位置図

図版目次

- 図版1 遺跡周辺の航空写真
図版2 田原城址全景
図版3 田原城址全景
図版4 田原城址調査地全景
図版5 田原城址濠部調査前全景
図版6 田原城址濠部斜面調査前全景
図版7 田原城址A-IV地区遺構全景
図版8 田原城址A-IV地区遺構及び遺物出土状況
図版9 田原城址濠部B-I地区巨石及び土器出土状況
図版10 田原城址濠部B-I地区土器出土状況
図版11 田原城址濠部B-I地区 錢・かんざし出土状況
図版12 田原城址濠部B-I地区 布袋・櫛出土状況
図版13 田原城址濠部C-I・C-II地区調査地
図版14 田原城址濠部C-I・C-IV地区調査地
図版15 田原城址斜面調査地全景
図版16 田原城址斜面・窓跡全景
図版17 田原城址窓跡全景
図版18 田原城址濠部全景・D-I地区
図版19 田原城址濠部D-II・D-IV地区
図版20 田原城址濠部E地区全景
図版21 田原城址出土遺物・I
図版22 田原城址出土遺物・II
図版23 田原城址出土遺物・III
図版24 田原城址出土遺物・IV
図版25 田原城址出土遺物・V
図版26 田原城址出土遺物・VI
図版27 田原城址出土遺物・VII

田原城址発掘調査概要・VI

I 調査に至る経過

日本住宅公団関西支社からの依頼により昭和50年度に大阪府教育委員会が田原団地建設予定地内の遺跡パトロール、又、昭和52年度に四條畷市教育委員会が遺跡パトロールをそれぞれ実施した。

その結果、国道163号と市道辰巳谷線の交差する西側の丘陵に花崗岩で築かれた横穴式石室1基を確認することができた。この丘陵は標高173mの地点から東向きに派生する3本の稜線のうち北端の丘陵中央部に位置している。未発掘のため出土遺物は不明であるが築造時期は6世紀後半頃と考えられる。もしこれが古墳とすれば今後この周辺の丘陵上に数多くの横穴式石室が検出される可能性がある。

次にこの古墳の東の眼下に流れる戎川と辰巳谷線の交叉する所に角堂橋と呼ばれる橋の周辺に瓦器碗、土師質皿、布日平瓦が數多く表面採集することが出来た。この橋の名にも出ている角堂は中世の堂があるのでないかと思われる。この場所は現在水田になっているが約50~60m四方の水田から上記の土器片が採集することができた。

山の中腹には、花崗岩が露出している巨石群が2ヶ所に見ることができる。又、この巨石群の周辺には花崗岩の石垣が築かれている。この石垣は地元で近世に切り石の残石で石垣を築いたと云われている。

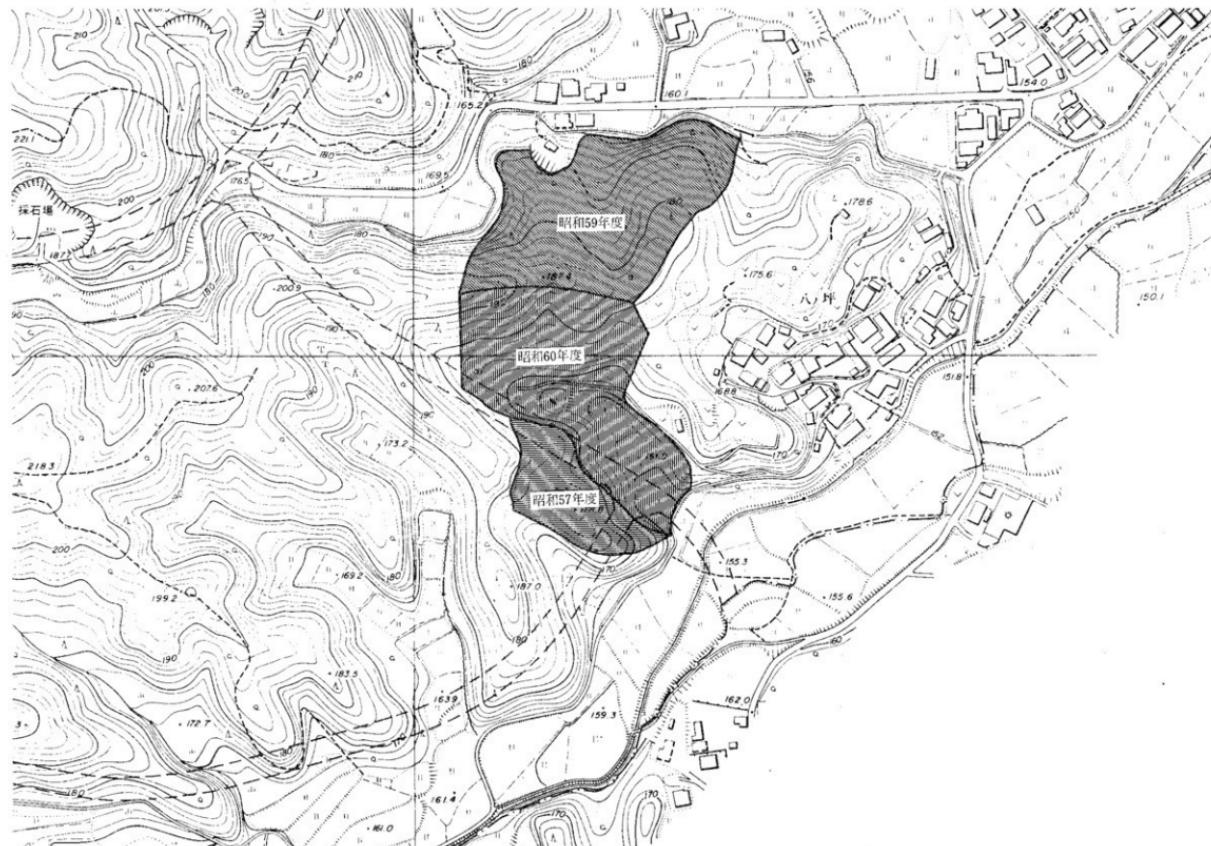
建設予定地の南端の字八ノ坪には田原城址が地元の協力により保存されている。

この田原城址については第Ⅲ章の田原城研究史について詳しく述べることにしたい。最後に建設予定地内全域に約50基以上の炭焼き窯を見ることが出来た。

大阪府教育委員会及び四條畷市教育委員会が発見した土器散布地を日本住宅公団作成の地図上に印を行ない、この資料をもとに日本住宅公団・大阪府教育委員会・四條畷市教育委員会の三者によって協議を行なった。この結果、昭和53年度に第一次発掘調査をこの土器散布地を中心とした遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

昭和54年度には第2次発掘調査として田原団地建設に係る戎川改修工事予定地内の調査を中心としたものであり、昭和55年度第3次発掘調査は、団地計画地域の南東部にかかる田原城址の範囲確認調査と、団地計画地域北部の戎川右岸と既成集落に隣接する丘陵地の遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

昭和56年度第4次発掘調査は、団地計画地域の南西部の旧水田地の石組造構-1連の調査を中心に実施したもので、昭和57年度第5次発掘調査は田原城主田原対馬守の屋敷跡と推定され、地元の方々が殿様屋敷と言伝えられている場所の調査であった。昭和58年度第6次調査は田原城の地形測量における実測調査であり、昭和59年度第7次調査は田原城北側濠部の全面発掘を実施している。今回の昭和60年度第8次調査は昨年の北側濠部に対反する南側濠部の全面調査を実施することにより団地計画地域内における田原城開削最後の調査であった。



第1図 田原城址年度別調査位置図 ($S=1/2500$)

II 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県の県境にある。田原は四方を山に囲まれた盆地として夏は四條畷市内より約1度～2度気温が低く住みよい場所である。

田原盆地の中央を北流する天野川が大阪府と奈良県の境になっている。

大阪府側は四條畷市大字上田原・大字下田原、奈良県側は生駒市大字北田原・大字南田原と呼ばれる地名である。

四條畷市大字上田原・下田原は、生駒山系東北部の山裾に位置し、北端には大阪から奈良への主要幹線道路の国道163号と地区外南部の阪奈道路にはさまれた南北約2キロメートル、東西0.8キロメートル、開発面積約125ヘクタールの区域の開発である。

田原団地建設予定地と東側に北流する天野川との間に、上田原及び下田原の既成集落があり、現在人口約1,400人の小規模な集落である。田原団地建設によって住宅都市整備公団の人口計画では3,900～約15,000人の人口がこの団地に住む予定になっている。

本地区の地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。

田原地区に係る文化財としては昭和54年度(第2次発掘調査)に団地建設に係る戎川改修と市道辰巳谷線の路線変更地の調査において縄文時代に属する土器・石器ならびに石組の遺構が検出された。遺物の包含地は南北43m、東西13mの水田地2枚分の範囲にわたっており、表土下約1mの赤褐色でやや粘土まじりの砂質土層から近畿でも数少ない早期に属するもので北河内地方の早期縄文遺跡である神宮寺遺跡に次ぐ遺跡である。

出土した遺物は山形押型文、梅円押型文、貝殻条痕文、過擦文の縄文式土器とともに石鎌、石ビ、石錐、大型搔器、搔器、剥片石器、小型尖頭器、ハンマーストーンの石器が伴出している。又、市道辰巳谷線と戎川との交叉する角堂橋の西120mの生駒山系東傾斜面山裾の標高T.P. 144.0mの水田地の全面発掘において、東西2.25m、南北2.45m、深さ40cmの土壤状遺構が検出し、遺構内堆積土層の褐色砂質土から土師質小皿、羽釜が出土した。土器形式からみて、また瓦器碗が共伴しないことから15世紀前半の遺構である。土壤状遺構の南において耕土下3.64mの深さの落ち込み状遺構が検出された。堆積土層は15層に細分され各層内からまとまった土器類が出土している。最下層から出土した須恵質口縁部や羽釜からみて12世紀中頃～終り頃とし、堆積土層上面からの瓦器碗、羽釜の出土から13世紀に落ち込み状遺構が完全に堆積したと思われる。

又、周辺では田原住吉神社境内の石槽があげられる。この石槽は花崗岩の巨石を加工した長さ約2m・幅約1m・高さ約0.7mのもので四日市街道工事中、天野川畔から出土しこの地に運ばれたものであり、この石槽と同型のものが大阪四天王寺に現存している。住

吉神社境内石槽は昭和48年3月30日に大阪府文化財考古資料第7号として指定されている。又、同境内西側に十三仏がある。十三仏とは死んだ人の初七日から三十三回忌までの十三回の供養する仏達を一枚の板石に刻んだもので、鎌倉末期から十三仏が始まるといわれている。この十三仏は永禄8年(1565)のもので田原地区には照涌野田墓地内十三仏とあわせて2基が現存する。四條畷市内には中野正法寺・中野共同墓地・南野弥勒寺等合わせて



第2図 田原城址周辺地形遺跡分布図

- | | | |
|----------------|-----------------|----------|
| 1. 照涌野田墓地(両幕制) | 5. 住吉神社境内石槽・十三仏 | 9. 巨石群 |
| 2. 正法寺薬師如来 | 6. 月泉寺墓地五輪塔 | 10. 石垣遺構 |
| 3. 森福寺跡 | 7. 田原城址 | 11. 石組遺構 |
| 4. 森山墓地(両幕制) | 8. 田原遺跡 | |
- (縄文早期・古墳・鎌倉時代)

7基が知られている。

次に上田原正伝寺別棟堂宇に高さ2mの薬師如来が安置されている。この仏像の胸のふくらみ、全体感、衣紋の滑らかさから見て平安時代のものとみている。

この薬師如来は、もと「森福寺と号する上田原所在の真言宗寺院境内」にあったことが、天保15年(1844)明細帳に見られ、天文2年(1534)付の「神道秘事書」の古文書からみて森福寺の薬師如来であったことが明らかである。現在は森福寺は廃寺となっている。又、正伝寺には両墓制がある。死者を葬った場所に墓碑を建て、そこを永久に祭りの場とするのを単墓制と呼ぶのに対し、比較的短期間祭りをしただけで近寄ることもせず、祭りをするための墓地を別の離れた場所に設けるのを両墓制と呼んでいる。一般に知られている墓地は単墓制である。

両墓制を残す所は全国で約70ヶ所報告されている。大阪では、富田林市、豊能郡田尻、枚方市津田の3ヶ所が数えられているのに對し、当市田原地区には、下田原5ヶ所、上田原に4ヶ所の墓地があって、月泉寺の五輪塔、卯塔墓地以外はすべて両墓制である。

次に田原城は上田原八の坪に所在する標高178.6mの生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに利用したもので、現在はこの城に関する文献資料はほとんど見当らないが、城郭に関連する地名が残されている。その地名と大小字名で「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」が地元で呼ばれている。

また頂上部の本丸跡にあたるところに現在住吉大神を分祀している館がある。本丸跡は南北約26m、東西約7mの削平地で本丸跡から田原盆地を一望のもとに見おろすことができる。又、北は眼下に古堤街道で、周囲は谷と川でめぐらし平地との比高差は約30m高くなっている。本丸跡の南側に「切り堀り」があり「井戸ヶ谷」へと続く「隠し井戸」と呼ばれる井戸があり、非常用の水利と考えられる。「切り堀り」より西側の畠地「二の丸」としての性格をもち、当時の居館のあったところと推定されている。又、西南隅に突出した丘陵が「西堀」と考えられる。

田原城は田原対馬守を城主としたもので戦国時代の終り頃に近畿の禦をとなえた三好長慶の麾下にあった飯盛城の支城としての機能をはたし、やがて織田信長の統一によって消滅していったものである。

III 田原城研究史

四條畷市田原地区について記された公刊文書は、平安末期の保延5年(1139)、久安元年(1146)の小松寺縁起奉加帳に「田原西郷・田原東郷」と記されるのが最初である。

田原郷は大和國と河内國に両分されていたかの如くに考えられる。江戸期の河内志には、上田原・下田原を河内國の項に説明し、南田原・北田原については「併に今は和州添下郡に属す」と記して、昔時は南・北田原も含め河内に属したかのような書き方をしている。併し、当田原が國・都制の大化改新期より河内・大和の何れに所属したかの史料は全く欠落しており何れとも断定し難い。

又、元禄2年2月11日に天野川沿いに、交野・岩舟より田原に旅して著名な紀行文を残した儒者貝原益軒は、60才の南遊紀行文の中に、「岩舟より入て、おくの谷中七八町東に行ば、谷の内顔広し。其中に天川ながる。其里を田原と云。川の東を東田原と云、大和國也。川の西を西田原と云、河内國也。一澗の中にて両国にわかれ、川を境とし名を同くす。此谷水南より北にながれ、又西に転じて、岩舟に出、ひき・所に流れ、天川となる。凡田原と云所、此外に多し。宇治の南にも、奈良の東にもあり、皆山間の幽谷の中なる也なり。此田原も其入口は岩舟のせばき山澗を過て、其おくは頗ひろき谷也。怡陶淵明が桃花源記にかけるがごとし。是より大和歌姫の方に近し。」と紀行されている。

郷土史家平尾兵吾氏が昭和6年に「北河内郡史蹟史話」を出版された。その中の田原城址の項に以下の通り記述されている。

田原村大字上田原字八ノ坪にある。附近よりの高さ約50mの丘陵上にあって、西は生駒清瀧の山に続き、東方田原盆地に望んで、南北は自然の河谷を控え頗る景勝の地形である。南側の山腹とか山上には階段状に平地が断続して居る、多分往時城廓の建物のあった址と思われるが、今は畠とか宅地とかになってしまって、当年の雄圖も壯觀も見る由もない。頂上には今小さな住吉の神祠が建てられてある、現今城の上、城の下、門口、上居の内、的場、矢の石などの古い地名が名所に残されている。

口碑の伝える所によると、往昔此地の名族に田原対馬守というのがあった。城砦をこゝに構え八の坪を根拠に南北田原を領して居た。今日田原村月泉寺と称する禅宗尼寺に保管する過去帳には、延元丙子の記年ある義俊院殿節山良忠居士以下享禄天文に亘る拾数名の法名がのせられてある、此月泉寺は元来水本村寝屋にあった月泉寺を移し、千光寺の名を廃したもので、もとは真言宗で千光寺と称し、城主たりし義俊院殿の開基で且其菩提寺であったといつて居る、足利氏末期の享禄天文の頃には三好氏が飯盛を根拠として、城を近畿にふるった頃で、田原氏は三好に属し、飯盛背面の防備に当ったと見られる。但し築造は此以前のものか或は三好当時に補修したか新に築いたか、總て分明でないのは遺憾至

極である。

尚、前記延元丙子三月五日の義後院殿節山良忠居士であるが、延元丙子は延元元年で五月廿五日は恰も大楠公が漆川で戦死の日、義後、節山、良忠の文字などについて考えても、勤王烈士の英靈を吊したものであるまいか、最近甲可村逢阪から出た延元元年の文字がある五輪塔婆と併せて考慮すべきものである。

田原城に残る城郭地名

標高175m、南北90m、東西100mの範囲に広がる田原城は、東に田原盆地を一望のもとに見おろし、北は眼下に走る古堤街道をおさえ、周囲を約3m幅の山水河流が開繞して自然の塗を構成する。田原城自体が生駒の第一の山脈の西側に突出した部分でたくみに地形を利用した中世の城である。

残念ながら現在は、この城に関する文献史料はほとんど見当らないが、「城下、門口、井戸谷、矢の石、土居の内、的場」等の城郭に関連する地名が残され、近くの古老は佐水の「古城」、そして聚落を垣内と呼び「出垣内・入垣内」今なお使用する人がいる。

土居の内は八の坪の別称、「土居の内」とは中世居住の聚落の周囲を防禦のためにめぐらす土塁をいい、土臺の屋敷、堀内と同じであってこの田原城は周囲を谷と川でめぐらしたものである。

一の門は田原盆地に望む東側にあり、すなわち東を正面とする田原城であった。一の門から小道を曲折しながら二の門を通り、なおも約40m程すむと本丸を頭上にして二分している。この二分する場所が地元の古老は三の門と言われている。本丸と二の丸とは同一丘陵であったが、この築城の際に切り堀りを行ない本丸と二の丸とを区画されたものである。本丸は26m×7mの削平地に開けている。

本丸の西側に位置する二の丸の規模は東11m×24m、西22m×18mである。本丸の東側に37m×7mの削平地があり、郭を築かれ防備を固めている。

切り堀りの西側には隠井戸と呼ばれる掘り井戸が二個並び、10m程離れて山水貯水池が存在する。

砦については、山口博氏が四條畷市史第1巻において「西砦」と呼ばれている所は、四隅が深い絶壁に廻らされ、天然の要塞をさしており、又、裏山砦は前面が2m余の急崖にのぞみ、20m×10mの郭を形づくって裏山づたいの防禦陣地を構成したと考えられている。今回の田原城の濠部発掘調査において、西砦と西側に突出する丘陵との間の深い水出地において濠を確認することが出来た。又、北側の尾根においての調査でも昭和59年度に濠を確認し、この濠を結ぶ範囲が田原城の城郭である。

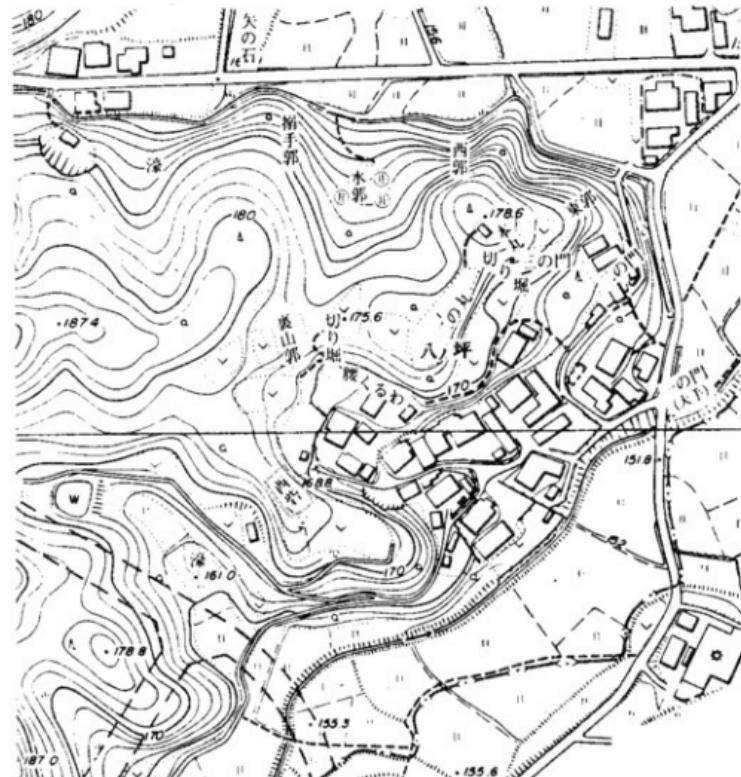
田原城主・田原対馬守

田原城主が誰であるのか、又、田原城をめぐる合戦が行なわれたかについては、明らか

ではないが、史料的にみて、城主田原対馬守の菩提寺の月泉寺の位牌の中に延元丙子(1336)三月五日、義俊院殿節山良忠居士。延文丙申四年(1359)十二月十日藤寿院雄山良意居士等が残存する。月泉寺墓地に三基の五輪塔と卵塔が立ち並び、三基の五輪塔の台石は五輪塔の基部たる地輪を敷き詰めたものであり、この墓地域内には五輪塔が100基以上が林立したものであろう。

領主は、当初南朝に属し、のち北朝に転じ戦国期には畿内に君臨した三好長慶の家臣として、飯盛城の出城の役目を担ったと考えられる。

三好長慶が飯盛城に拠ったのが永禄三年(1560)十一月十三日、三好の家臣となって大和をも睨んだ田原対馬守は、織田信長の畿内制覇の中、飯盛城の陥落・廃城と共に姿を消したのだろう。



第3図 田原城址構造図

IV 調査概要

田原城址は第Ⅲ章の田原城研究史でくわしく述べたように生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに地形を利用した中世の城である。

田原城の本丸・二の丸・裏山郭・西砦が住吉神社境内や地元土地所有者の協力によって完全に保存されており、田原城の西側一帯が住宅都市整備公園田原団地建設予定内にかかるために濠部の全面発掘調査を実施したもので、以下概要報告を行う。

今回の調査地は田原城の構造図に示されている西砦(15m × 12m)の西側の谷間に調査地である。この谷間にには8枚の棚田式の水田地と2ヶ所の人工池となっており、上位と下位の水田面及び水面は、上位でT・P・169.03m、下位でT・P・157.61mで比高差11.42mを測る。西砦との比高差は14.63mである。

棚田式の水田地及び人工池をA～Dの4調査区に分けて実施した。A調査区は、棚田式水田下から3枚目の水田の大字上田原920番地までと上田原921番地と西砦との間の畠地の合計4枚の水田地及び畠地である。B調査区はA調査区の北側1枚の水田地とその北側の裾部の計2枚の水田及び畠地である。C調査区は棚田式水田下から5～7枚目とその北側の畠地の計4枚の水田及び畠地。D調査区は2ヶ所の人工池とその間にあった水田地の計3枚の水田及び人工池である。

A調査区は8枚の棚田式の水田地の最も低い所に位置する。水田中央部に幅2.5m、長さ6.8mのトレンチ(A-I(4))と幅4.5m、長さ7.4mのトレンチ(A-I(口))の2本の調査区を設定した。

A-I(4)(第5図)の層序は、第I層耕土、第II層床土、第III層は厚さ約50cmの青灰色砂質土層、第IV層は厚さ約40cmの青灰色粘質土層が堆積し、第V層は厚さ40cm～50cmの青灰色粘土層、第VI層は厚さ約60cmの青灰色砂質土層(粘土混り)、第VII層は厚さ約20cmの黒色砂礫層(有機混り)、第VIII層は厚さ約180cmの黒色粘土層(有機混り)が堆積し地山となる。

A-I(口)(第5図)の層序は、第I層耕土、第II層床土、第III層は厚さ約10cmの褐色粘質土層(砂混り)、第IV層は厚さ約50cmの褐色粘質土層、第V層は地山の縫みに赤褐色砂礫層及び暗灰色粘質土層(礫混り)が堆積している。第VI層は約40cmの黄褐色粘土層(礫混り)、第VII層は黒褐色粘土層(砂混り)がブロック状に堆積している。第VIII層は厚さ約30cmの青灰色粘土層、第IX層は厚さ約50cmの青灰色粘質土層、第X層は約40cmの黒色粘質土層、第XI層は黒色粘土層(有機混り)で地山になる。地表下約2.9mで地山に至っている。

次にA-I(4)内第IV層青灰色粘質土層から土師質小皿、銭(寛永通寶)、A-I(口)内第III層褐色粘質土層(砂混り)から練り鉢、第IV層褐色粘質土層から土師質片がそれぞれ出土している。

A-III(4)(第5図)は大字上田原919番地に幅4m、長さ4mの調査区を設定した。層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約30cmの灰色粘質土層(砂混り)、第Ⅳ層は厚さ約90cmの青灰色粘質土層(砂混り)で、厚さ約20cmの褐色粘土層(砂混り)がブロック状に堆積している。第Ⅴ層は、厚さ20cmの青灰色砂礫層、第Ⅵ層は、厚さ40cmの黒色粘土層(砂混り)、第Ⅶ層は、厚さ約100cmの黒色粘土層(有機・砂混り)で地山となる。すなわち耕土下約3.8mの塗部となる。出土遺物としては、第Ⅳ層の青灰色粘質土層から土師質片、磁器片が出土している。

北側断面図に認められている攪乱層は昭和55年度の田原城塗部確認調査の第1トレンチである。

A-II(4)(第5図)はA-I(4)のすぐ北側に幅4m、長さ6mの調査である。第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約25cmの青灰色粘質土層、第Ⅳ層は厚さ約35cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅴ層は厚さ約20cmの青灰色粘質土層(砂混り)、第Ⅵ層は厚さ約40cmの暗灰色粘土層、第Ⅶ層は厚さ約40cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅷ層は厚さ約10cmの青緑色粘質土層、第Ⅸ層は厚さ約40cmの暗青灰色粘土層からなっており地山となる。出土遺物としては、第Ⅲ層の青灰色粘質土層から陶磁器片、第Ⅹ層の暗青灰色粘土層と地山との境からサスカイト片がそれぞれ出土している。

A-II(5)(第5図)はA-II(4)のすぐ北側に幅5m、長さ5mの調査である。第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約40cmの青灰色粘質土層、第Ⅳ層は厚さ約20cmの暗青灰色粘質土層(砂礫混り)、第Ⅴ層は厚さ約25cmの青灰色粘質土層(砂混り)、第Ⅵ層は厚さ約30cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅶ層は厚さ約45cmの暗青灰色粘土層、第Ⅷ層は厚さ約40cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅸ層は厚さ約80cmの黒色粘土層(有機混り)、第Ⅹ層は厚さ約70cmの黒色粘土層(砂・有機混り)、第Ⅺ層は厚さ約35cmの青灰色砂礫層で地山に至る。耕土下約3.9mで塗底部となる。次に各層序からの出土遺物としては、第Ⅱ層の床土から陶器、陶器、第Ⅲ層の青灰色粘質土層から磁器、第Ⅴ層の青灰色粘質土層から磁器片がそれぞれ出土している。

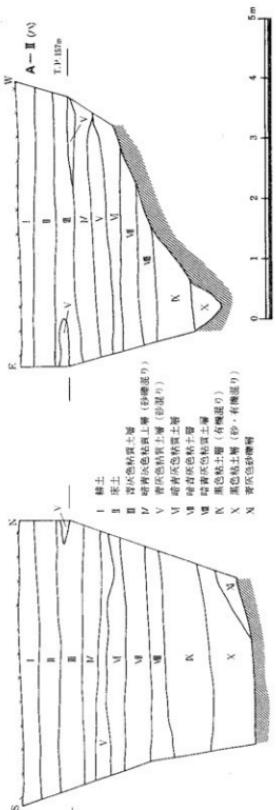
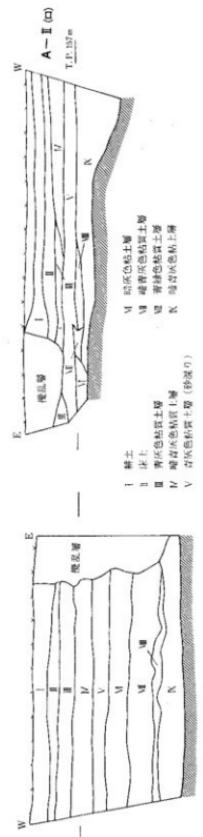
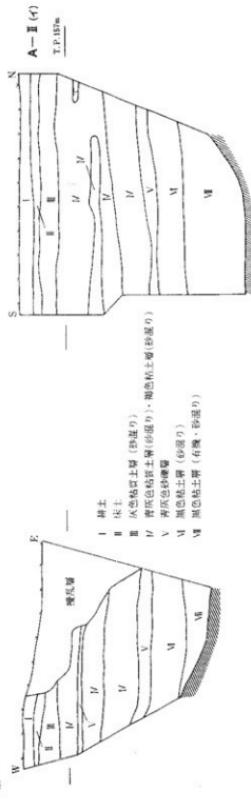
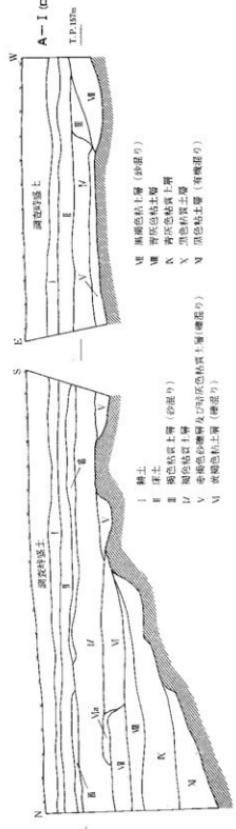
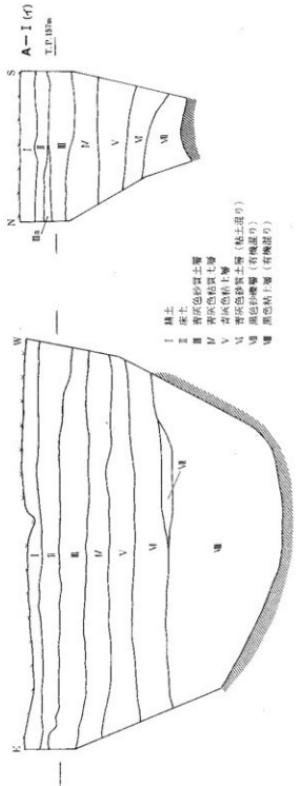
A-IV(第6図)は上田原920番地の水田地に幅6m、長さ10mの調査で第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層A床土(砂混り)、第Ⅲ層B床土(粘土混り)、第Ⅳ層は厚さ約25cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅴ層は厚さ約10cmの青灰色(黄混り)粘質土層(砂礫混り)、第Ⅵ層は厚さ約35cmの青灰色粘質土層(砂混り)、第Ⅶ層は厚さ約45cmの青灰色粘質土層、第Ⅷ層は約6cmの青灰色粘土層、第Ⅸ層は厚さ約45cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅹ層は厚さ約40cmの黒色粘土層(砂混り)でこの下で地山面が一部に検出している。最下層の第Ⅺ層は黒色粘土層(有機・砂混り)で地山に至る。最深部で耕土下4.7mである。

塗部の断面観察ではA-IV調査地が塗部底部がV字状を呈する塗として明確にされる場所であり、出土遺物としては、第Ⅱ層の床上から土師質小皿、大皿、羽釜、香炉、練鉢、甕、

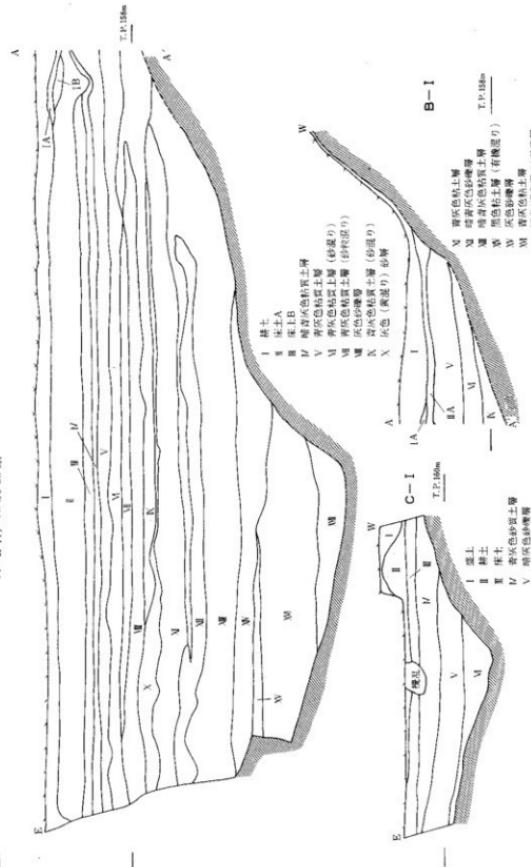
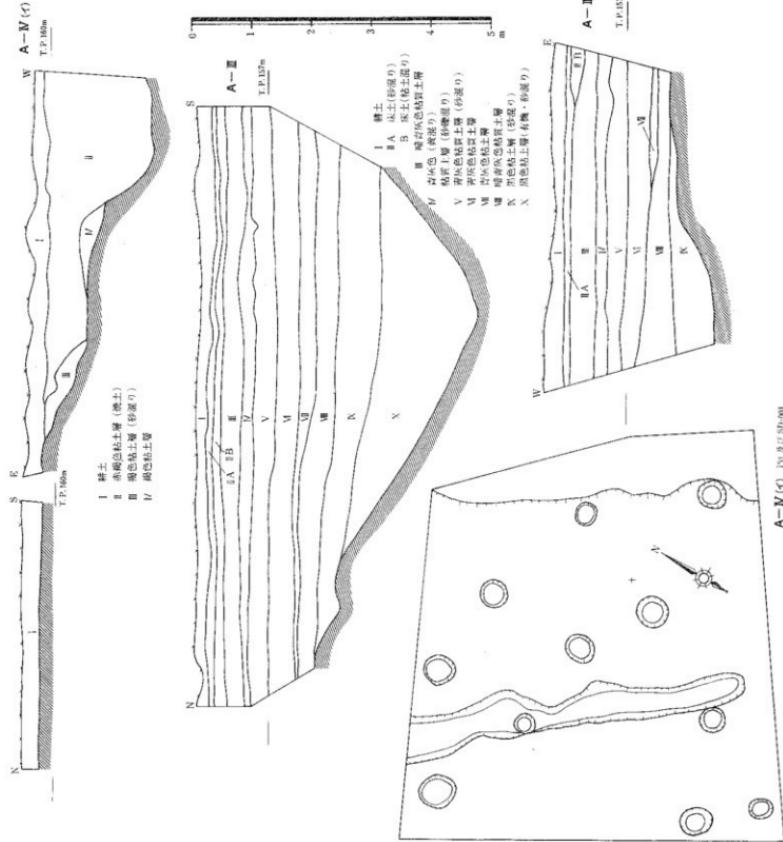


第4図 田原城址南濠調査位置図

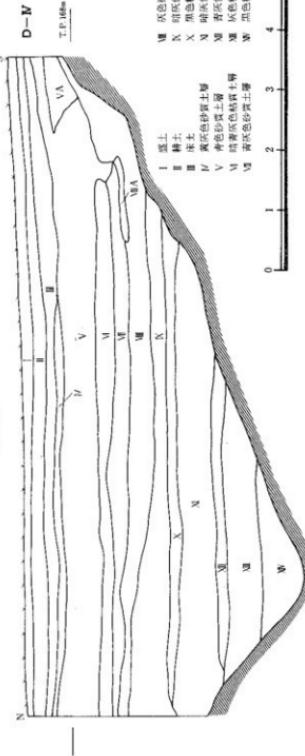
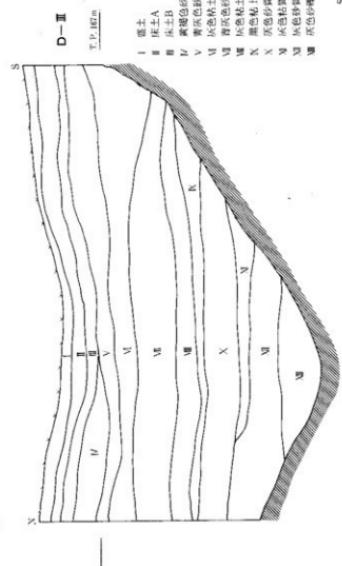
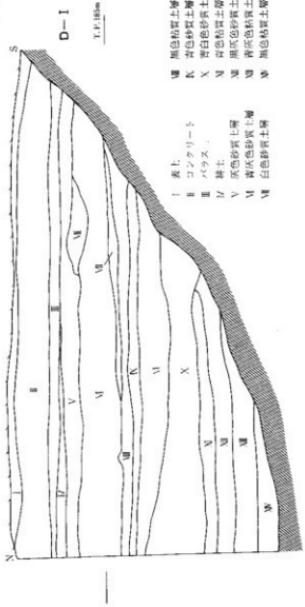
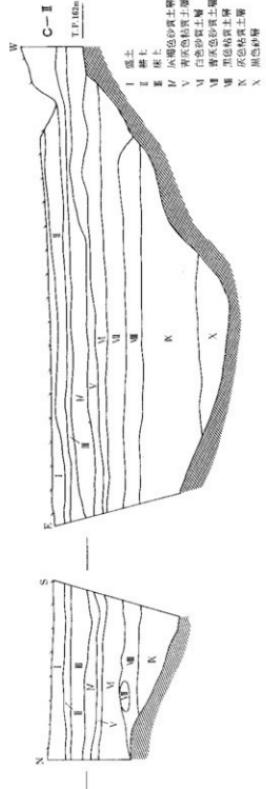
第5図 田原城南溝調査区断面実測図・I



第6図 田原城南濠調査区断面実測図・II



第7図 田原城南濠調査区断面実測図・III



陶磁器、第Ⅲ層の暗青灰色粘質土層から土師質皿、磁器、砥石、銭(寛永通寶)、煙管の吸口、第Ⅳ層の青灰色(黄泥り)粘質土層(砂礫混り)から土師質皿、摺鉢、羽釜、磁器、銭(寛永通寶)、第Ⅴ層の青灰色粘質土層から磁器がそれぞれ出土している。

A-IV(第6図・図版7・8)は上田原918番地の畠地に幅8m、長さ8mの調査で第I層耕土、第II層は厚さ約180cmの赤褐色粘土層(焼土)、第III層は厚さ約35cmの褐色粘土層(砂混り)、第VI層は厚さ約40cmの褐色粘土層で斜面の堆積である。出土遺物としては、第II層の赤褐色粘土層(焼土)から羽釜が出土しており、田原城址西砦のすぐ西側一段下った所に位置し、この羽釜は田原城に関連する遺物である。

ほぼこの斜面は濠部二段堀であったと考えられるもので、この濠部内に赤褐色粘土層(焼土)が堆積した段階に掘立柱建物が建てられ、又、溝が掘られている。

Pitが11ヶ所と溝1条が耕土下で検出され、各Pit内から土師質小皿片と溝内から土師質小皿6枚が一括で置かれた状態で出土し、又小皿の北側には寛永通寶1点が出土している。

この寛永通寶は新寛永一文銭で背文に正字文があり武藏国江戸村鑄銭地の龜戸銭で寛文8年(1668年)初鋤年の銅銭である。

B-I(第6図・図版9~12)はA-III地区のすぐ北側の濠部内で最も大きな水田地である。上田原921番地、昭和55年度の調査時に第I地区第3トレンチとして幅3m、長さ12mの南北トレンチを設定したところであり、この調査時においては耕土下約3m以上の濠であることを指摘しておいたものである。今回はこの水田地及びその西側斜面にもトレンチを設定し南壁断面で東西に17mを確認することができた。この断面の層序は以下のとおりである。

第I層耕土、第II層床土A、第III層床土B、第IV層は厚さ約10cmの暗青灰色粘質土層、第V層は厚さ約20cmの青灰色粘質土層、第VI層は厚さ約30cmの青灰色粘質土層(砂混り)、第VII層は厚さ15cmの青灰色粘質土層(砂粒混り)、第VIII層は厚さ約40cmの灰色砂礫層、第IX層は厚さ約20cmの青灰色粘質土層(砂混り)、第X層は厚さ約30cmの灰色(黄泥り)砂層、第XI層は厚さ約50cmの青灰色粘土層、第XII層は厚さ約10cmの暗青灰色砂礫層がブロック状に暗青灰色粘土層内に堆積している。第XIII層は厚さ約60cmの暗青灰色粘質土層、第XIV層は厚さ約35cmの黒色粘土層(有機混り)、この層位において地山である花崗岩及び花崗岩風化層である地山を確認した。第XV層は厚さ約20cmの灰色砂礫層、第XVI層は厚さ約90cmの青灰色粘土層、第XVII層は最下層である黒色(褐色混り)砂礫層で厚さ約45cmの堆積で地山となる。耕土下約5mで地山に至るもので、両側斜面の濠部肩部から計測すると7mになる。

出土遺物としては、第IV層の暗青灰色粘質土層内から土師質小皿、羽釜、香炉、壺、摺鉢、磁器、茶碗、瓦とともに馬形土製品、土製布袋像、銭(寛永通寶2点)、煙管の吸口、かんざし、櫛等が出土した。昭和60年度調査分の出土遺物の約8割強がこの調査区出土遺物で

大半の土器、土製品、金属器は江戸時代のもので、この濠がほぼ埋められたのは江戸時代後半のもので、その後現在見ることのできた水田化がなされたものである。

C-I(第6図・図版13~14)は上田原922番地、棚田式の下から6枚目の畠地に調査区を設定した。この畠地にも昭和55年度の第1地区第2トレンチを設定した場所である。層序は第I層盛土、第II層耕土、第III層床土、第IV層は厚さ約30cmの青灰色砂質土層、第V層は厚さ約40cmの暗灰色砂礫層、第VI層は厚さ約50cmの黒色粘土層で地山となる。出土遺物としては、第V層の青灰色砂質土層から土師質小皿、磁器、陶器が出上している。昭和55年度の調査においても、IV層内から陶器、練鉢、土師質小皿、瓦、羽釜、須恵質等が出土していた。

C-II(第7図・図版13)はC-Iの北側水田地で同じく上田原922番地に幅5m、長さ10mの調査区を設定した。層序は第I層盛土、第II層耕土、第III層床土、第IV層は厚さ約25cmの灰褐色砂質土層、第V層は厚さ約15cmの青灰色粘土層、第VI層は厚さ約10mの白色砂質土層、第VII層は厚さ約30cmの青灰色砂質土層、第VIII層は厚さ約30cmの黒色粘土層、第IX層は厚さ約100cmの灰色粘土層、最下層のX層は黒色砂層で厚さ約50cmで地山となる。出土遺物としては第III層床土内から磁器片、第VII層の青灰色砂質土層から土師質口縁部、第IX層の灰色粘土層から土師質小皿がそれぞれ出土している。

D-I(第7図・図版18)はC-I・C-IIの地番と同じ上田原922番地の溜池内の調査である。この場所は戦前まで水田であったが、その後土地所有者であった柴田氏によって溜池として使用されていた所である。層序は第I層表土、第II層コンクリート、第III層パラス、第IV層耕土、第V層は厚さ約30cmの灰色砂質土層、第VI層は厚さ約70cmの青灰色砂質土層、第VII層は厚さ約10cmの白色砂質土層、第VIII層は厚さ約15cmの黒色粘土層、第IX層は厚さ約20cmの青色砂質土層、第X層は厚さ約40cmの青白色砂質土層、第XI層は厚さ約25cmの青色粘土層、第XII層は厚さ約40cmの黒灰色砂質土層、第XIII層は厚さ約40cmの青灰色粘土層、第XIV層は厚さ約35cmの黒色粘土層で地山に達する。すなわち、地表下約4.5mで濠部の地山面が明確に検出した調査地である。断面観察の結果、溜池は旧耕土の層位から上にパラス及びコンクリートによって壅止めたものである。出土遺物としては、第VI層の青灰色砂質土層内から土師質小皿が出上している。

D-III(第7図・図版19)の層序は第I層盛土、第II層床土A、第III層床土B、第IV層は厚さ約40cmの黄褐色砂質土層、第V層は厚さ約20cmの青灰色砂質土層、第VI層は厚さ約40cmの灰色粘土層、第VII層は厚さ約65cmの青灰色砂質土層、第VIII層は約40cmの灰色粘土と砂層混り層、第IX層は厚さ約15cmの黒色粘土層、第X層は厚さ約60cmの灰色砂質土層、第XI層は厚さ約20cmの灰色粘土層がブロック状に堆積している。第XII層は厚さ約60cmの灰色砂質土粘土混り層、第XIII層は厚さ約70cmの灰色砂礫層で地山に達する。この濠部は地表

下約4.4mであった。出土遺物としては、第Ⅳ層の灰色粘土層から土師質皿と漆器碗が出土している。

D-IV(第7図・図版19)は上田原922番地の最上段にあたる位置にD-Iと同じく溜池として使用されている場所が調査地である。層序は第Ⅰ層盛土、第Ⅱ層耕土、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層は厚さ約10cmの黄灰色砂質土層、第Ⅴ層は厚さ約60cmの青色砂質土層、第Ⅵ層は厚さ約20cmの暗青灰色粘質土層、第Ⅶ層は厚さ約20cmの青灰色砂質土層、第Ⅷ層は厚さ約40cmの灰色砂礫層、第Ⅸ層は厚さ約60cmの暗灰色粘質土層、第Ⅹ層は厚さ約20cmの黒色粘質土層、第Ⅺ層は厚さ約60cmの灰色粘質土層、第Ⅻ層は厚さ約65cmの黒色粘土層で地山に達する。この位置の塗部の土砂堆積は約4.65mであった。出土遺物としては、第Ⅲ層の床土から土師質皿、砥石、第Ⅺ層の青灰色粘質土層から羽釜、土師質口縁部の土器片が出土している。

次にC～D調査区の濠部北側一帯の南斜面をすべて第Ⅰ層表土を除去した結果、谷筋については第Ⅱ層黄赤褐色砂質土、第Ⅲ層褐色砂質土層、第Ⅳ層淡青灰色砂質土層、第Ⅴ層灰色砂質土層、第Ⅵ層暗灰色砂質土層、第Ⅶ層黒色粘質土層が堆積し地山となっている。斜面によっては表土下3.6mの土砂が堆積している場所もあり、一般的には約30cmの堆積だけであった。

C-IV地区と北側最高所の公園開発外の夜啼地藏仏とのほぼ中間の南斜面の海拔178.73mのラインに直径95cmの円形を呈する窓跡が1基検出した。(図版16～17) 窓跡の北壁に1本の煙道を設けられている。煙道部のT-Pは178m、窓内底部のT-Pは177.113mで窓内には炭5点のみ出土であった。

戦前から公園開発予定地内には花崗岩の切石が活発に行なわれていたことは、昭和53年度の分布調査で明らかにされていた。この分布調査によても第2に炭焼き窓が山の斜面において数多く認められていたが、今回の窓のような急傾斜面に築かれていたものはなく、時代的にもさかのぼる資料であると考えられる。

V まとめ

昭和60年度の発掘調査は田原城の濠部と斜面の調査で、位置的には第3図の田原城址構造図に示したところの西堀の西側の深い絶壁下の標高T-P-157.83-160.53mの棚田式谷水田地が中心であった。各調査区の堆積土層は第IV章でくわしく述べたとおりである。現在まで田原城址については四條畷市史執筆者の山口 博氏が数少ない史料の中から、天保15年、上田原村差出明細帳に「古城跡、字城山、堀ヶ所廻し、凡武百年以前永様之比、当地守護田原対馬守様御城跡と申伝候」とあって、田原対馬守なる田原領主が永様年間(1560年代)、田原城に拠って当地を支配していたと、くわしく研究されている。同氏の研究史は文献を中心に田原城址削平地の館跡を構造図に示しているもので田原城址研究史上きわめて重要な構造図であった。

この田原城について第1に、いつにこの田原城が構築されたかという問題であるが、山口氏は田原城構築を15世紀後半の河内守護島山家の内紛頃に始まるのではないかと考えられている。このように田原城は1回も発掘調査のメスを入れることがなかった。

田原城址の範囲については、本丸を中心とした北、東、南の三方については深い絶壁に廻らされた山水河流の周囲した濠を構成していたが今回の城跡北西側の範囲があと一步明確にされていなかった。しかし、昭和55年度の田原城址範囲確認調査において今回の濠部を試掘調査で確認し、同時に昭和59年度の発掘調査区である北西の濠部も明確にされた。昭和57年度の調査区は濠部の西側高台のT-P-166.53mの平坦地は地元の人々によって殿様屋敷と呼ばれて離がれた山林であり、この調査において掘立柱建物跡及び落ち込み状遺構と深さ7.2m、幅80cmの石組井戸が検出され、屋敷跡の可能性を裏付ける各種土器が出土しており、田原城構造図に追加して範囲を示すところまでできている。又第1の問題とされていた構築時期については、濠内堆積土層内から出土した元豊通宝の錢と古墳時代後期の須恵器以外については、ほぼ田原城構築時期を決める資料が出土した。すなわち出土した土器質小皿及び、瓦器椀、羽釜、摺鉢、漸戸焼おろし肌、伊万里焼などからみて、上限年代を14世紀中葉に比定することが出来る。北宋錢の元豊通宝(1078~1085)が出土したもののこの時期に比定される土器は現在のところ出土していない。

上田原の佐水、正伝寺西側台地上、「古城」と字地されることからこの一帯に田原領主の居館跡に関する資料かは不明であるが、この台地上に住んでいた遺構等が近世に削平され谷地形地に埋めたものであろう。

次に住宅都市整備公團出原町建設予定地内の文化財発掘調査で検出された遺構、遺物について簡単に説明しておきたい。これまでに検出された遺構は、摺文時代早期の落ち込み状遺構(石組)2基、中世の落ち込み状遺構、掘立柱建物跡、土壤状遺構、溝状遺構が確認さ



第8図 田原城及び古城位置図 ($S=1/10000$)

れ各遺構内から豊富な各種遺物が出土した。

第2次調査の際出土した中世の土壤状遺構内から出土した75枚にのぼる土師質小皿が括して出土し、又、落ち込み状遺構は表上下約3.6mの深さで今まで擾乱されることなく堆積土層が観察することができた。

戎川左岸に検出した縄文時代早期の押型文土器に伴なう落ち込み状遺構を取り囲むように検出された花崗岩の石列が検出したことは、交野市神宮寺遺跡、枚方市穗谷遺跡だけでなく近畿地方の縄文時代早期の文化を研究する上で重要な資料である。又、縄文時代早期出土の押型文土器出土層上面から弥生時代前期の壺が1点出土している。この弥生式土器は現存高22.3cm胴径最大径23.0cmで胴部中央に最大径を有し、胴部より頸部にかけて、3条・6条の貼り付け突帯に刻み目をもち、外面胴部にハケ目を施す大阪北部に特徴をもつ攝津の土器であり、畿内第Ⅰ様式(新)の時期のものである。

ここで今回までの調査によって得られた成果を本概要報告書にしめくくることにしたい。

田原盆地に初めて人類が住みついた年代については、縄文時代早期の山型文、楕円文の押型文土器、貝殻条痕文、過擦文を施した土器が出土した時期の人類がこの田原の里に長期間住みつき生活したものである。この縄文式土器と同一層内から出土したサヌカイト製尖頭器・細石器・石核等の出土から人類の住みついた縄文時代早期より一時期古い旧石器時代人が住んでいた可能性も出でてきている。

又、出土した弥生式土器から北河内の弥生遺跡の出現が四條畷市雁尾遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡の弥生時代前期において発見されている。次に、田原城址濠内からの須恵器出土とあわせて、この田原の派生する丘陵の突端部に数多くの古墳が今後も検出する可能性がある。

中世については始めに述べた各遺構から出土した瓦器椀編年から落ち込み状遺構が12世紀の中頃～後半につくられ13世紀に埋められている。その他の遺構も14世紀代に作られ、掘立柱建物跡から終末期の瓦器椀が出土している。最も新しい時期の遺構としては土壤状遺構があげられる。出土した土師質皿には全く瓦器椀を伴出しておらず15世紀代のものである。

最後にこの田原に係るものとして「田原鑄銭司」のことを述べておきたい。柴原永遠男氏が、古代を考える10「河内國府と国分寺址の検討」の中で「鑄銭司の変遷と立地について」、「河内鑄銭司」にふれて一題して報告されている。この本文中に山城鑄銭司(加茂町銭司)とほぼ並存すると考えられている「田原鑄銭司」が生駒市から四條畷市にかけての地域に比定されている説があり、この裏付け資料として『大日本古文書』(編年)16巻に天平宝字6年に編年した誤りを宝字4年(760)に二貫二百十四文自生馬輪東山運和炭井炭二百冊四斛一斗雇車十八両貨八十文自生馬鷹山運炭八斛車一両貨、二貫九十二文自輪東山運炭二百廿二斛一斗車十六両貨(十二両別百冊一文・四両別百冊文)冊二文自登美鑄司村運

炭十四軒車一両貸。

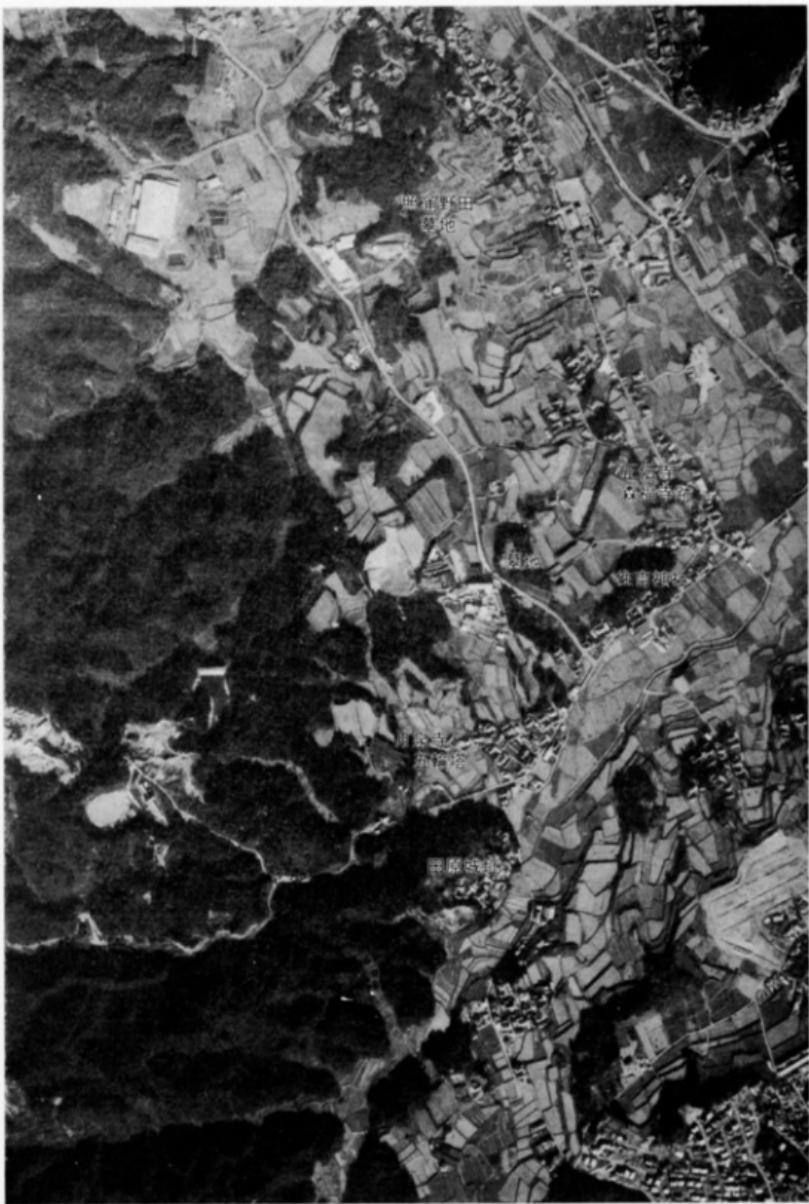
この中で「登美銭司村」「輪東山」があり輪東山は相楽郡和束町の地名が現存しており、「生馬鷹山」や「登美銭司村」は清滝街道と富雄川との交叉する地域に「高山」というところがある。すなわち登美銭司村がこの富雄川の下流の現在地名の登美ヶ丘町があり和炭の産地でもある。すなわちこの「田原鑄銭司」もこの付近と考えられ、生駒市「北田原」「南田原」か、四條畷市「上田原」「下田原」付近と考えられている。今後この住宅都市整備公園田原団地建設予定地内に直接銭関係を示す、るつぼ、ふいご口、鉛洋、凹石、銅塊等が将来出土する可能性が出てきた。

圖

版



図版1 遺跡周辺の航空写真





図版3 田原城址全景



図版4 田原城址調査地全景

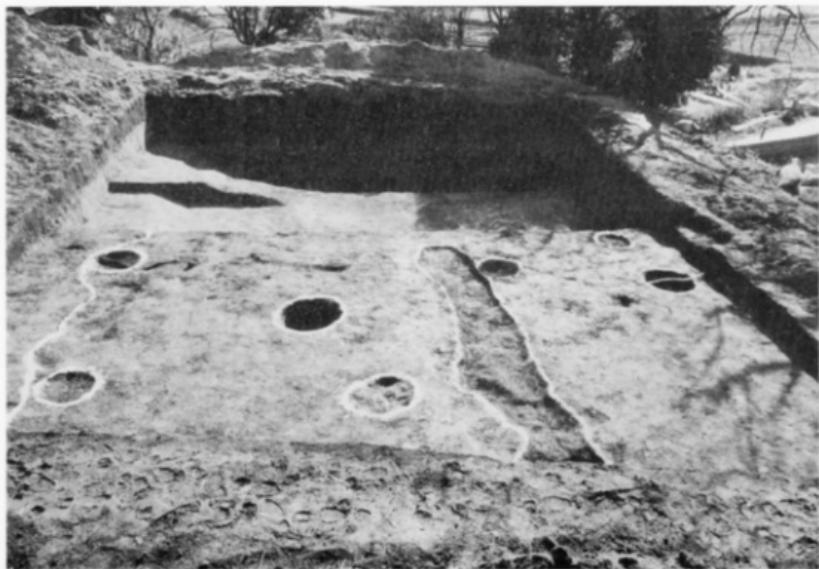
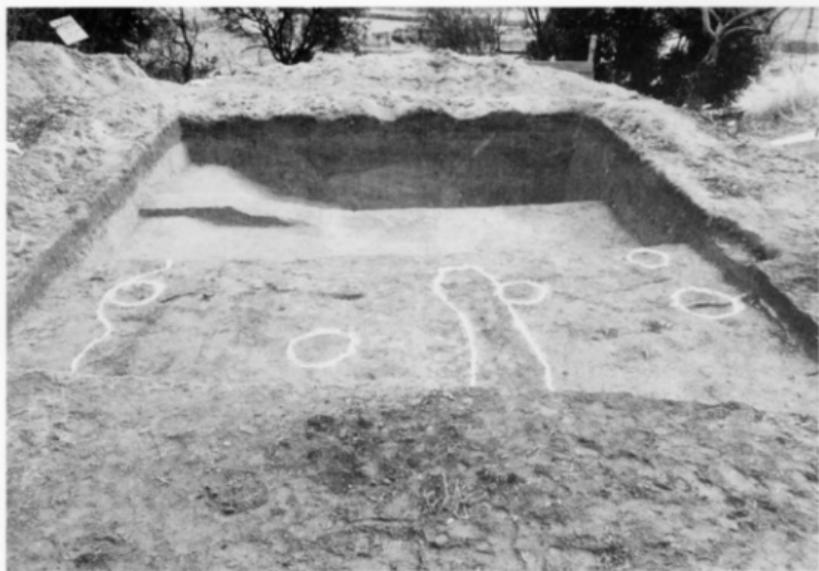




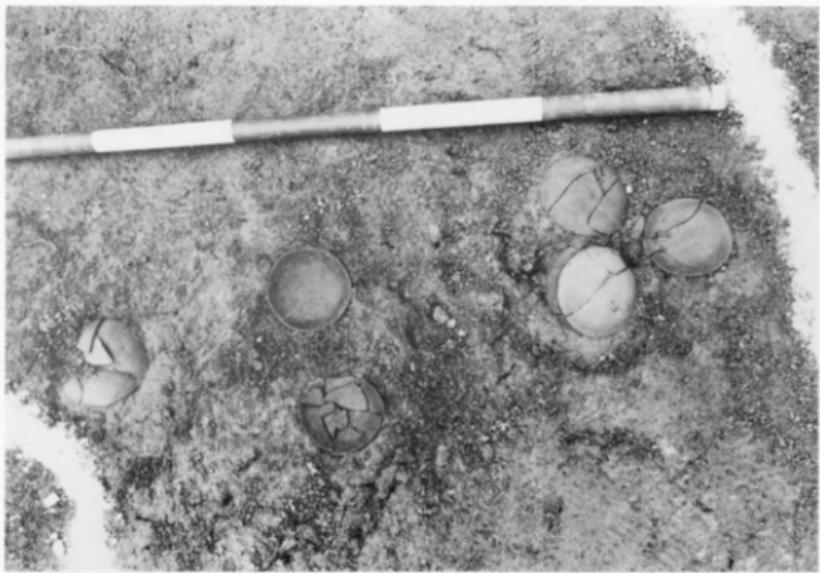
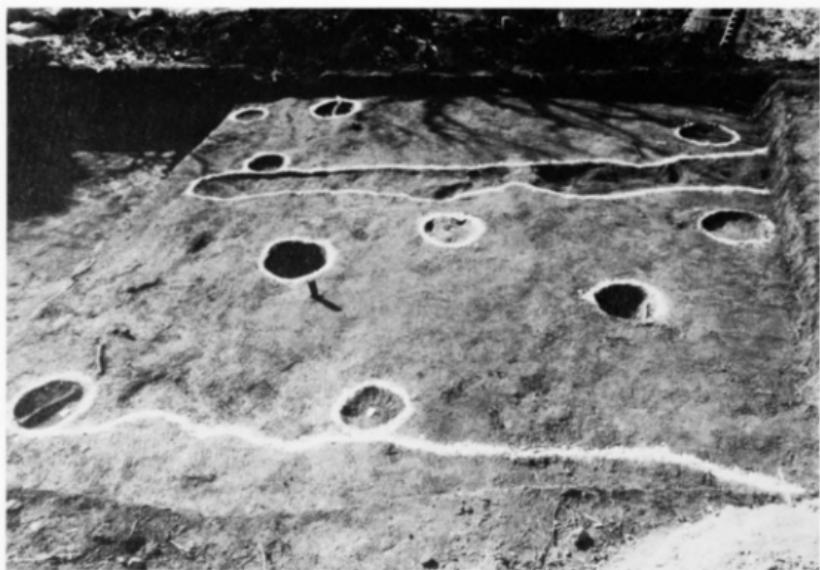
図版6 田原城址濠部斜面調査前全景



図版7 田原城址A-N地区遺構全景



図版 8 田原城址 A—I 地区遺構及び遺物出土状況



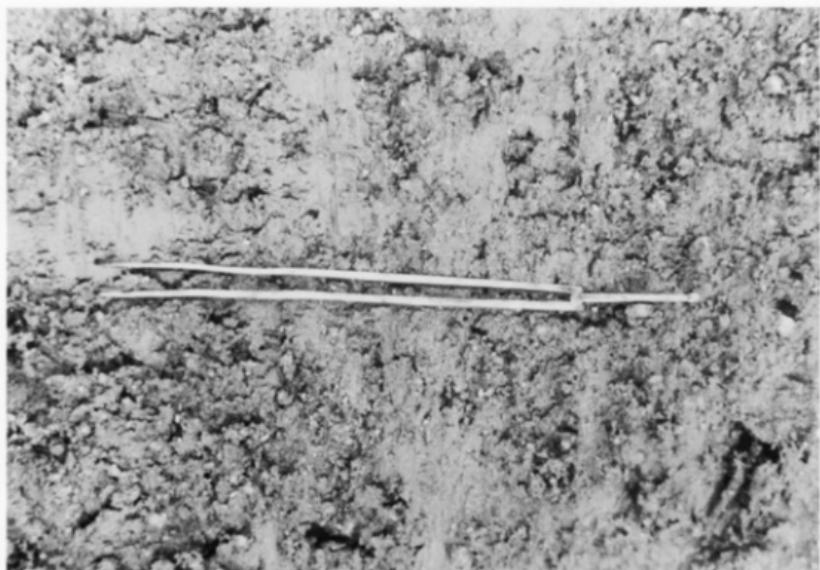
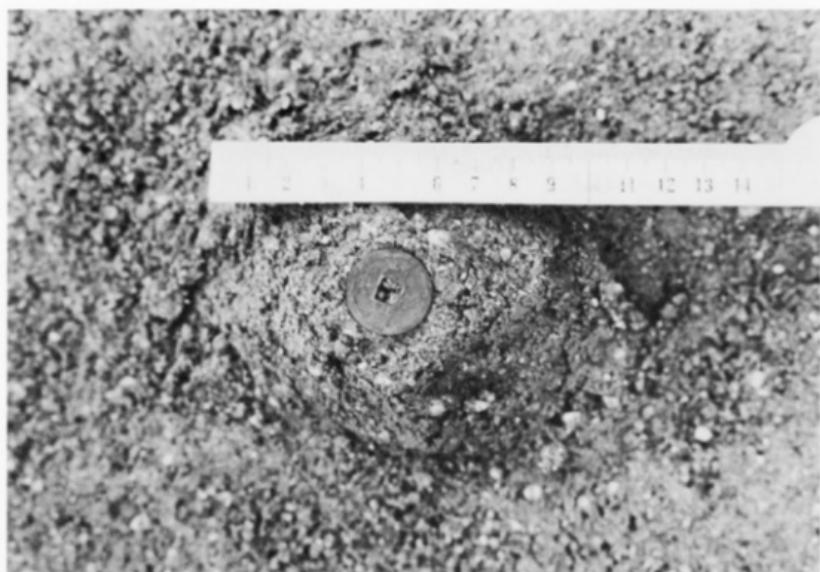
図版9 田原城址濠部B—I地区巨石及び土器出土状況



図版 10 田原城址濠部B—I地区土器出土状況



図版 11 田原城址濠部B—I地区錢・かんざし出土状況

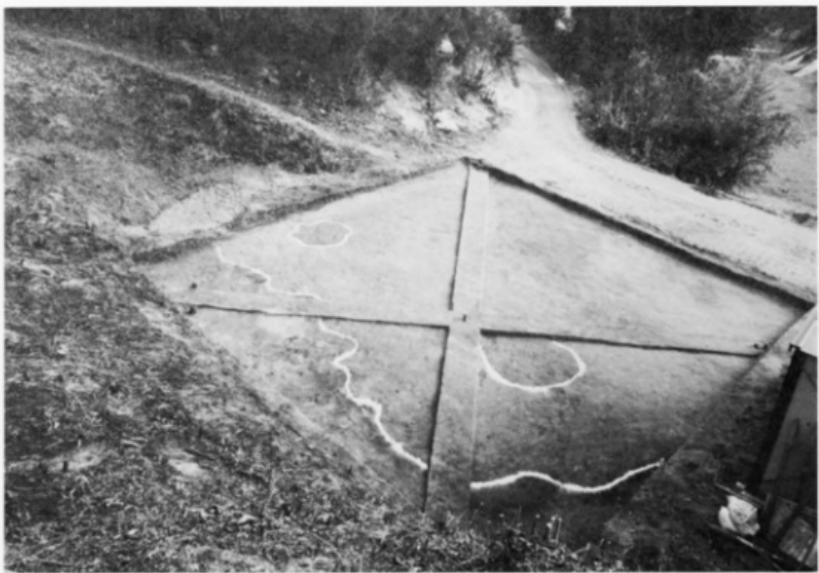


図版 12 田原城址濠部B—I地区布袋・桶出土状況



図版13 田原城址濠部C—I・C—II地区調査地



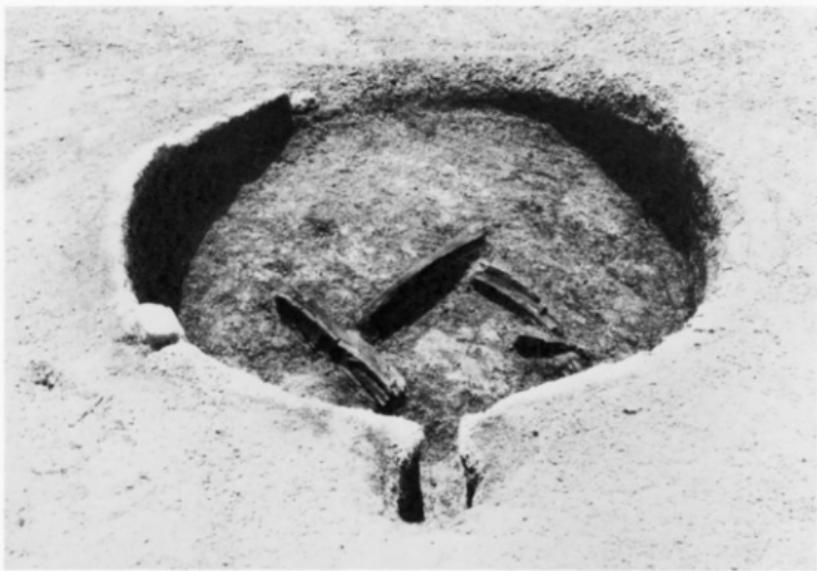
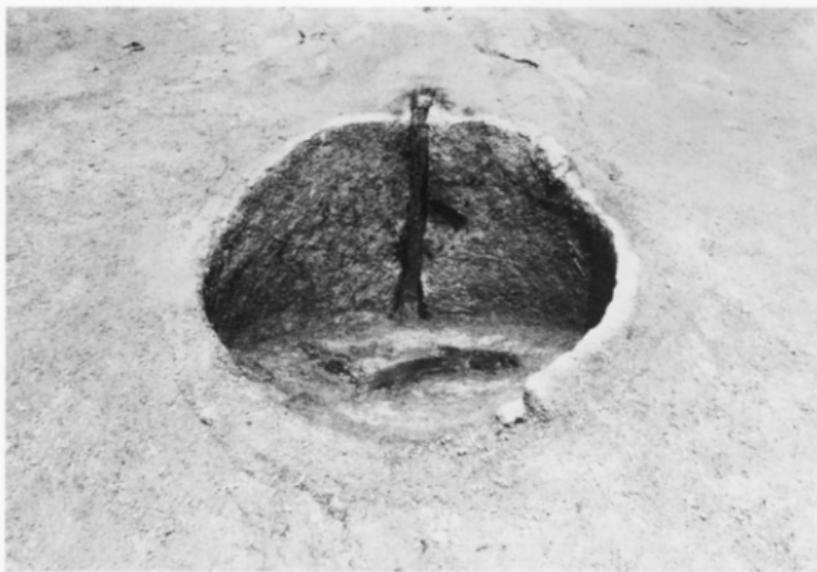


図版15 田原城址斜面調査地全景





図版17 田原城址窯跡全景



図版18 田原城址濠部全景・D—I地区

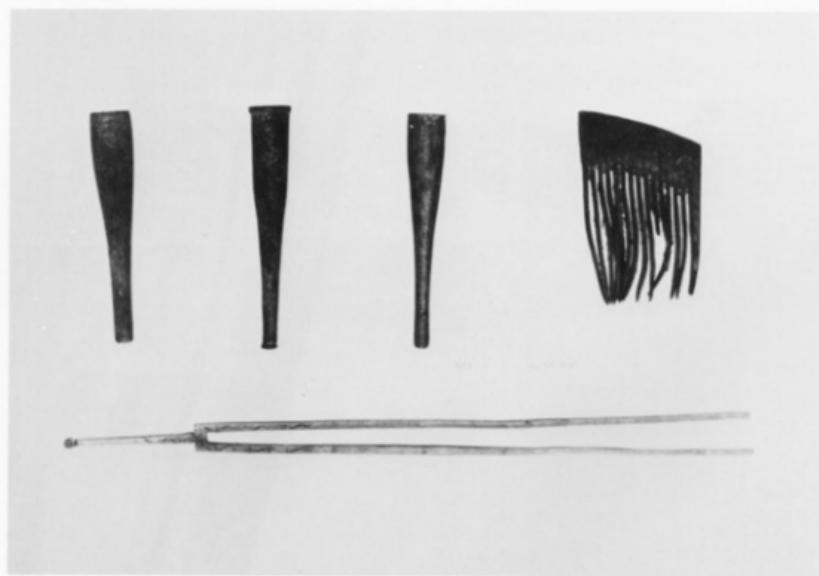
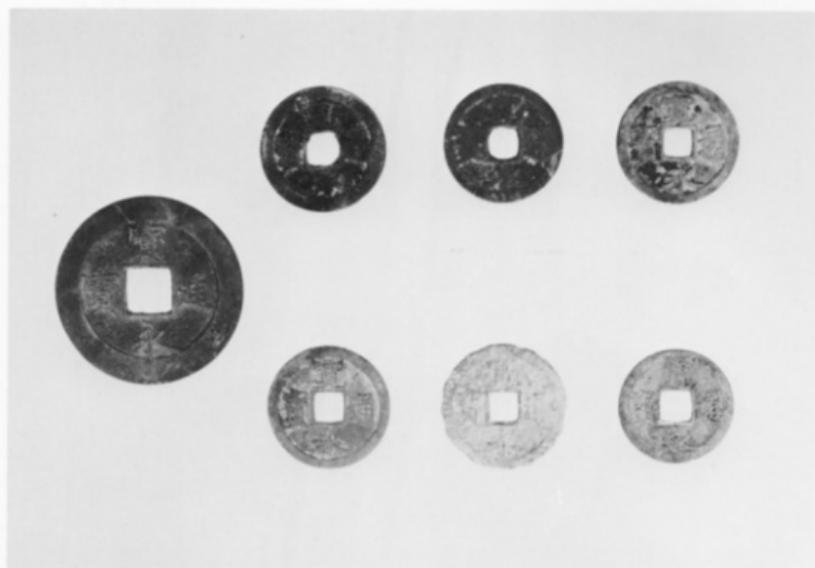


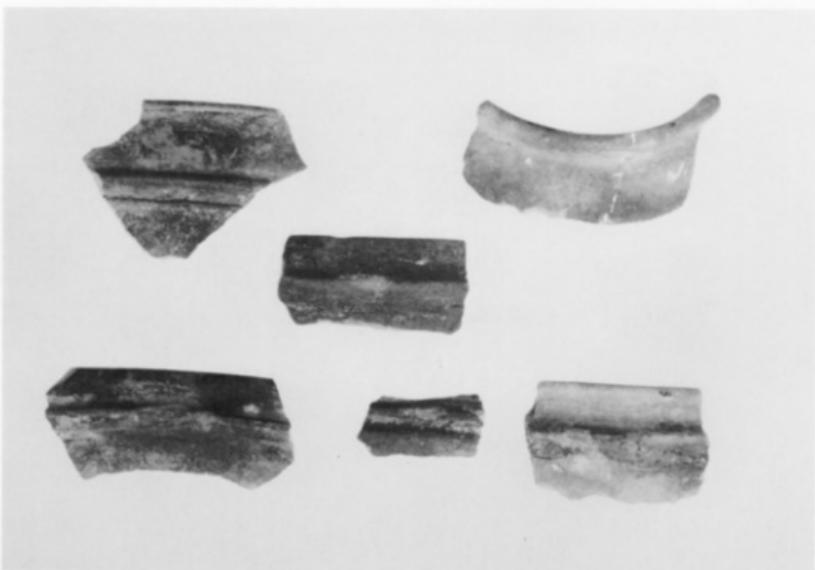
図版 19
田原城址濠部 D—III・D—I 地区

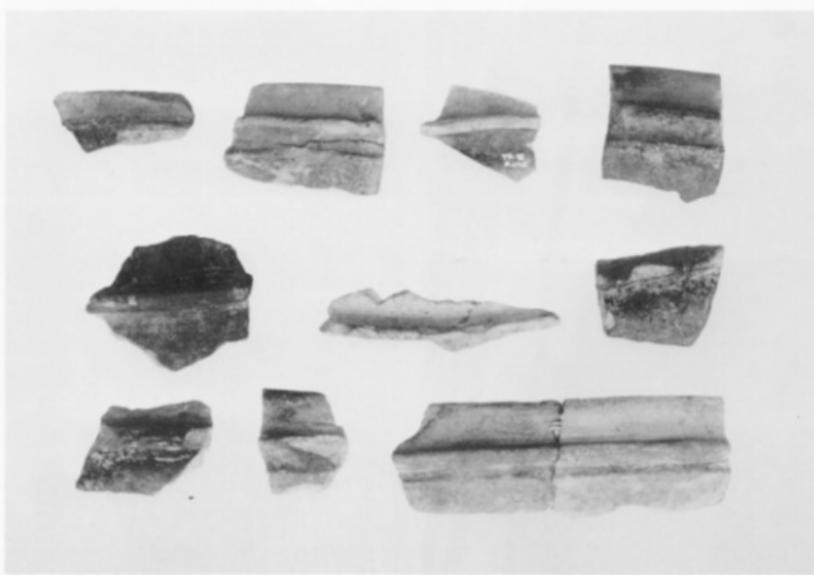


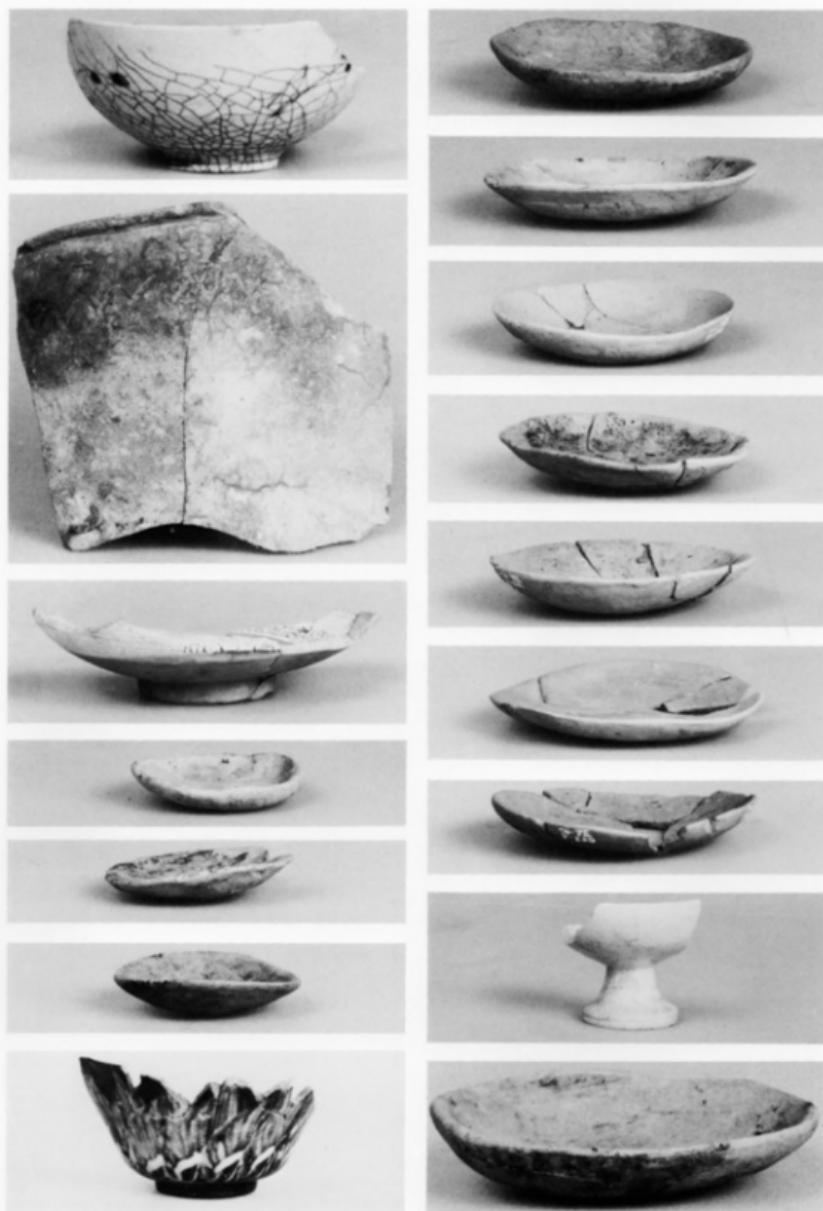
図版20 田原城址濠部E地区全景

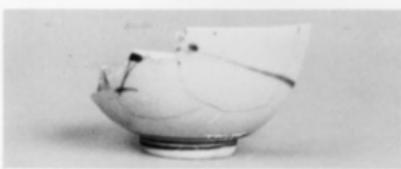
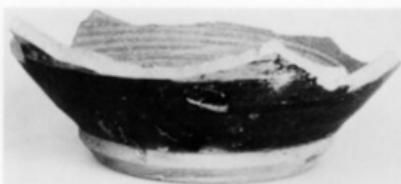
















田原城址・VI

—1985年度—

昭和61年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

〒575 四條畷市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社